

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

他愛ない話

三股金利

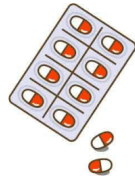
来し方はつもり重なり行く末は、ありやなしやの今日この頃。

長年の不摂生のせいかな年末には血圧が200近くになり機械が壊れたのかと何度も計り直したが結果は同じ。私が壊れつつあるのだった。

年を取っても年末年始はなぜか高揚感を隠せない。格闘技から始まるこの時期はさすがに酒がなければ。飲みたい一心で嘱託医に電話。年末最後の診療を終えた午後一番に先生が薬を持って作業所まで来てくれた。「ああ、ありがたや、ありがたや」

通常の通院では「お金と違って薬はよく貯まります。夜の薬は定期預金になっていきますので」と調整を依頼すると先生から「血圧はサイレントキラーだから危ないよ」と脅しともとれる言葉。今考えるとなんて不謹慎な患者だったでしょう。それでも私のことを気に遣ってくれて。薬を受け取ったとたん先生のおことが大好きになりました。何でこんなにうろたえたのか。昨年の七月にお袋が高血圧に

よると思われる脳幹出血を起こし半身不随となった。そのときも190ぐらいいったそう。親子そろって半身不随になったら・・・女房が荷物をまとめ出て行く姿が浮かぶ。「二人で一人前になるから」という説得も無理だろう。これからは増量された薬とともにする生き方を強いられ、お国に迷惑をかけ続けることになってしまう。殊勝な考えと同時に薬さえあれば・・・とまたまたもの自分が頭をもたげるのである。



年々縮んできたお袋が半身不随になりさらに弱々しくなった。よく独り身で頑張ってくれたと思う。父親は、私が2歳の時に他界。

日本住血吸虫病という珍しい病気に冒され、千葉大病院を経て東大病院でもお世話になったという。父親の面影もなく、以来母ひとり子ひとりの生活、何歳頃のことなのか、脳裏に浮かぶのは母親が

田植えをしているところ。モノクロで動きはないのに、なぜか水田に落ちる雨粒によってできる水の輪ができては消える。稲刈りの季節にも雨模様のなか稲束を円錐状に立てかけられた中からお袋の背中を見ている。いずれも暗い。いつかはひとりになってしまおうのではないかという恐れが常にあった。当時母子家庭は



まれだったが、今はこれもライフスタイルと言うぐらいい多い。子どもの気持ちはどうだろう。私は父親の存在だけでいい。病弱でも家族構成の欄に父親の名前を書けたらいいと思っていた。こんな幼少期を過ごしてきたせいか、子どもたちが大人の理屈で犠牲になっているのを見聞きするたびに憤りを感じるようになった。

小学校に上がると障害をもっている児童もいたし在日の友達もいた。私が父親のことを隠すように彼は国籍を隠し、貧しい子どもは昼食時に弁当を新聞紙で隠していた。押し黙りながら食べる女の子を皆見て見ぬふりをした。触れてはいけないものだった。総体に貧しかった時代だから、そんな理由でいじめることはしなかったのだろう。

中学になると学力差が出て、というよりも軽度の知的障害か学習障害だったのだろう。N君は字が読めなかった。担任の先生はそれを承知で教科書を読ませようとした。彼に向かって「本が逆さまだ」と

と言った。でも彼は本の向きを直すこともなく黙ったまま立っていた。周りの空気が止まったように感じた。その瞬間「写真があるから上下は解るか」と先生は笑った。悲しかった。彼が好きだった。よく下校時に栗拾いやアケビを探しに山に入った。彼はどこに何があるかよく知っていてガイドをしてくれた。自信にあふれた顔をしていた。

新校舎に移ったばかりの教室で彼と相撲を取っていてサツシのガラスを割ったときも先生に注意を受けた。「あんな奴と遊んでいるからだ」母親に五千円の弁償については詫言だが先生の言葉には反感をもった。

N君は高校も行かず地元で大工になったと聞いていたが、数年前自宅近くの小屋の火事で焼死した。当日の現場を車で通り過ぎた翌日、小さな新聞記事が地方版に載った。町の小さな学校だったので皆顔見知り、幹事が熱心で毎年同窓会をしていたのだが彼が顔を見せたことは一度もなかった。



あの頃は反抗期で先生にはよく殴られた。小学校の卒業式は、父親のように慕っていた先生に校長室で殴られ、中学の入学式当日も新任の女教師からビンタを受けた。叩きながら彼女は泣いていた。悪いのは常に私であつた。止まらぬ衝動のはけ口は常に大人に向けられていた。今だったら私の挑発にのって何人クビになっただろう。でも無視をされずにありがたかった。あるときは通知表の裏に折り

たたまれた長い手紙が貼ってあったこともある。親子で泣いた。先生から見ればやつかいだけど面白い存在だったかもしれない。

人前が苦手で自分のことはなるべく控える環境を選んできた思春期。ジョルジュ・ムスタキの歌う「私は寂しくない。なぜならいつも孤独と一緒にだから」というようなフレーズに自らを重ねた時もあった。しかし、ひとりという安定はいつも寂しさと同居していることは自覚していた。こんな時私を助けてくれたのが酒だった。こんな書き方をすると依存かと思われそうだが、私にとっては大きな転機になったのだ。

今まで必死に自分の正体を隠そうとしていたものから酒が開放してくれた。カミングアウトの後はいくらでも飲めるのだ。



社会にはいろいろな事象が潜在している。私は無視されることなく逆に手厚くされた。一方、存在自体を無視され続けられた人たちがいる。出生届が出されていながためにこの世には居ないことになっている無戸籍の人たち。戸籍など日常生活に何の関係もないと思っていたのだがこの問題は根が深い。普通に育ってきたのに就学の通知もなく義務教育も受けられない。学校へ行っているふりをするためにだけ買ったランドセル。民法の改正など親の責任だけ

とはい言切れないことも含まれているようだが、子どもを産み、育てることをどう思っているのだろうか。



年をとるってこういうこと、と思えるほど昔日のことは芋づるのようにつながっていくのに新しいことの記憶力は乏しくなる一方である。

技術革新が続くこんな世の中にいていける人がどれだけいるだろう。便利なものが人を幸せにしているのだろうか。ロボットやAIが席卷し人間の居場所がなくなる。里山から這い出てくるイノシシと同様何かに追いつてられているようで寂しいものだ。苦勞して取った資格なんてあつという間に記念物になってしまいかもしれない。ついていけない者は、足手まといや迷惑となってしまうのだろうか。私たちの仕事は、生身と生身の関係性を作りあげること。知能で組み上げること絶対出来ない。簡単に言うとな柄がベースである。だから終身雇用という日本文化を残せる可能性が福祉の世界にあると私は信じている。老若取り混ぜた職場。だから時にはジジイの話も聞いて欲しいナ。



私は生まれながら手足が不自由で、幼少の頃は群馬県の児童の施設で過ごした。10歳の頃、自宅に戻ったが、学校には通わず、訪問教育を受けたのを記憶している。17歳の時に、県立の鶴舞荘(当時の身体障害者療護施設)に入所し、2回目の施設生活がスタートした。

鶴舞荘が開所(昭和50年)して3年した頃に入所し、一部屋20畳程の畳部屋に5人で生活をしていて。その頃は皆若く、ワイワイと賑やかに過ごしたのを思い出す。かれこれ34年もの月日を鶴舞荘で過ごし、建物も古き昭和の様相を呈してきた。そんな中、施設が民間に移譲される話が持ち上がり、私たちの生活が一変する事態が発生した。果から民間に：想像がつかなかった。

ふる里学舎に移譲先が決まり、入れ替わり立ち替わり若い職員がやってきては私たちの引継ぎがなされていった。



引越先は「ふる里学舎静風荘(平成23年7月開所)」個室になると聞いた時は、何十年もの大部屋生活と別れるのは、寂しい気もしたが、今となっては、一人の時間に、好きなDVDも観られ、同室者に気兼ねする

こともなく個室生活を満喫している。

私の楽しみは、音楽鑑賞。30歳の時に父親と“Wrinkle”(今の人には分からないでしょう)のライブに行き、そこからライブにはまってしまう。当時は、介護タクシーと言うものがなく、外出は、今は亡き父親が頑張って車椅子を押してくれた。今は便利な世の中になり、介護タクシーを利用して、色々なライブに行けるようになった。35歳の時にサザンオールスターズのライブに行き、その時の感動が忘れられず、ファンクラブにも入った。年に一度はライブを観に行つて楽しんでいる。今度、チケットが取れたら、気分が知れた職員



実は横浜の中華街にも行つてみたが、段差があり、混雑しているところは苦手だ。私の車椅子は身体との関係で他の人よりも大きくてスペースを取ってしまう。外に出掛けても、子供にぶつかったり、手が勝手に動いてしまうので、他の人にぶつかつたらどうしようかと心配である。

静風荘でも年に2回くらいは職員と一緒に買い物や食事に出掛けている。職員は80名いる利用者希望に合わせて、色々な所に連れて行くのは大変だろうなと思う。出かけた時に、ちょっと羽目を外して好きなものを好きなだけ食べるのも楽しみの一つ。少し食べすぎかなと思つて職員の顔を見ると、ニタツと笑いながら黙っていてくれるのがたまりません。静風荘に戻つてから私の具合が悪くなつたら、看護師や施設長に怒られちゃう

のでしょね。

職員は毎日の介護を一生懸命やってくれている。ただ、忙しうにしている。できれば食事の時にゆっくり話したり、昼ではなく夜にお風呂に入ったり、もっと気軽に掛けられたら良いなという思いもあるが、我が儘はともやない。自宅で生活している身体障害者の人は、ヘルパーさん(移動支援等の制度)と一緒に掛けっていると聞きま

す。入所の施設はそういう福祉のサービスはありません。自分にとっては、静風荘が自宅なんだけども。この違いはよくわからない。グループホームやアパートでの一人暮らしという選択もあると言われても、この歳で生活を変えるのは正直しんどい。

大自然の国

フィンランド

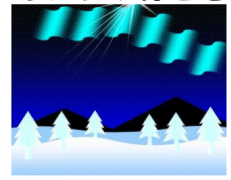
河田 理紗子

「オーロラ見た？」旅行後、沢山の山にそよ声を掛けられた。日本に住んでいる限りオーロラを観る機会はまず無い。

さて、8日間の旅で私たちはオーロラを観る事が出来たと思いますか？

早いもので佑啓会に入職し、3年が過ぎようとしている。その年はしぜん工房が開所し、皇太子様の行啓訪問もあった。テキパキ

と仕事をこなす先輩を見て、凄いなと感じていたのを思い出す。4月1日辞令交付式。里見理事長より「好きなところに行つてきてください」と同期の猪狩主任と共に、サブライズプレゼントを頂いた。折角こんな機会を頂いたのだから、思う存分楽しませてもらう。



『死ぬまでに世界の絶景を見てみたい』とお互いの意見が合致し、オーロラを観ることに決めた。

飛行機で約10時間。日本との時差はマイナス7時間。飛行機を乗り継ぎキッティラ空港へ。到着すると一面雪が積もっている。そして寒い！一気に異国の地に来たに吹っ飛んでしまった。ホテルに到着し休む間もなく早速1回目のオーロラ観測。街の灯りが殆どない場所まで行き、みんなで空を見つめる。どこをどう見ても分厚い雲が広がっている・・・初日はこんなもんだらうと私は早々に寝てしまった。

翌日はスノービレッジへ。雪と氷で出来たホテルやレストランだ。世界各国から彫刻家が集まり、施設内の彫刻を施したそうで、そのクオリティーの高さには驚いた。この夜はガラスイグルーに宿泊。天井の一部がガラス張りであるからオーロラが見られるというホテルだ。今夜見られたら最高だよねと話していたが、生憎この日も雪が降り続く曇り空。とても素敵なホテルだったが、星すら見えなかった・・・

オーロラ観測は夜なので、日中

は観光に出かけることが出来た。事前に調べ、絶対に食べたいと思つていたトナカイバーガーがホテルの近くで食べられると言うので行ってみる。フィンランドでは普通に食べられているそうで、そんなに可愛いのに食べてしまうのかと軽くショックを受けたが、牛も馬も一緒かと思ひ直す。手の平ほどの大きいハンバーガーが出てきた！味はというと、少しクセがあるがなかなか美味しかった。

サンタクロース村へ行くと、建物の造りがとても素敵で降り積もった雪が相まってどこを見ても絵本の世界にいるようだった。サンタクロースに会った時は、子供の頃の気持ちに戻つたように嬉しかった。

夜になると、バスで観測ポイントへ。予報では今夜こそ期待が持てそうと意気込む。外に出ると、この旅で初めて月が見えたが、徐々に雲に隠れていく。雨男、雨女ならぬ雲男、雲女がツアーの中にいるに違いない。

明くる日、寝台列車に乗るために集合すると、そこへ添乗員が走ってきて、「今オーロラ、見えてます。」と。急いでみんなで北へ歩く。列車の出発まで時間がない。これが実質最後のチャンス！？ドラマなら間違いなくここが一番の盛り上がり所だろうが、ううん。よく分からない。肉眼で見えないけれど、オーロラは写真に撮ると緑に映るらしい。みんな一心不乱に空を見上げ写真を撮つたが、ほとんど条件が揃わなければ観ることが出来ないようだ。大空に輝くオーロラを想像しながら寝台列車に乗り込むと、驚くほど狭く、全てを諦めて寝るしかなかった。日本のように到着アナウンスもなければ出発のアナウンスもないので、熟

睡してしまわないか心配だった。日本は何て親切なんだと改めて母国を誇りに思つた。

最後のチャンスとして帰りの飛行機から見える事があるという。離陸して、ロシア上空あたりがポイントだと教えてくれた。猪狩主任が窓の外を撮り始めた。うっすら雲のようなものが見えているという。「あれかな？」何枚も撮っている。撮った写真には確かに筋状の緑色のものが映っていた。肉眼では暗闇に白い雲のようなものがある。そこへ添乗員がやって来て「オーロラ見えますよ」と教えてくれた。やはりこれがオーロラだった！最後の最後で無事に？オーロラを観ることが出来、日本へ帰国した。

冒頭で、帰国後沢山の山に声を掛けられたと書いたが、私たちは浮かない顔で返事をしていたことだろう。オーロラの事しか綴らなかったがフィンランドは大自然と現地の方のだからさでとても素敵な国だった。親戚家も多いという。自然相手には中々思い通りにはならないもので、想像していたオーロラではなかったが人生の経験値が上がった8日間の旅となった。

大自然と向き合うように、利用者に対してでも大らかな気持ちで接していきたいと思つた。貴重な経験をありがとうございました。

(ふる里学舎松香園 支援員) 編集後記

先日、静風荘の窓からウリポーを連れて歩いているイノシシの姿を見かけました。暖かくなつてくると、ウサギやリス、タヌキも出てきます。そんな自然豊かなふる里学舎から第103号をお送りします。(静風荘 支援員 武田 優貴子)